

第5回公認心理師国家試験

分析速報

2022年7月19日 河合塾 KALS

2022年7月17日（日曜日）に、第5回公認心理師国家試験が行われた。本資料では、第5回公認心理師国家試験の出題形式・出題内容・問題の難易度等を、過去の公認心理師国家試験と比較しながら徹底分析する。

1. 基本情報

- 試験時間・問題数・マークシート用紙は、全て第4回までを踏襲。
 - ・午前の部（10時～12時）、午後の部（13時半～15時半）各120分の2部構成。
 - ・マークシート用紙はAとBのいずれかが渡される。用紙Aは塗りつぶす①～⑤が横にならんでおり、用紙Bは①～⑤が縦にならんでいる。マークシートが用紙Aであっても用紙Bであっても試験問題に違いはない。
 - ・多くの試験会場で、試験開始60分後から終了10分前までは途中退室可。ただし、試験開始時間の遅れなど、試験会場や状況によっては途中退室ができない場合もある。
- 解答形式は、**5肢択一**（5つの選択肢から1つを選ぶ形式）、**4肢択一**（4つの選択肢から1つを選ぶ形式）、**5肢択二**（5つの選択肢から2つを選ぶ形式）の3種類。5肢択二問題は、選んだ2つの選択肢が両方とも正解していなければ得点にならない。第4回試験で5肢択二形式の出題数が減少したが、第5回試験では例年通りに戻る形となった。

表1 解答形式比較

	第1回本試	第2回試験	第3回試験	第4回試験	第5回試験
5肢択一	105題	116題	114題	124題	119題
4肢択一	26題	14題	19題	18題	14題
5肢択二	23題	24題	21題	12題	21題

（第1回追加試験は省略。以下全ての表にて同様）

- 不適切な選択肢を選ぶ問題が、特定の番号帯に固めて配置されている点も第4回試験までと同様。例えば、第5回試験の午前問題の34番～50番は、すべて不適切な内容の選択肢を選ぶ問題である。さらに「不適切なものを選びなさい」と問題文に下線が引いてある点も第4回試験までと同様。問題数は以下の表2の通り。全体として、不適切な選択肢を選ぶ問題は増加傾向にあったが、第5回試験では第1回試験と同程度に減少し、適切なものを選ぶ問題が出題の主体となった。

表2 選択内容比較

	第1回本試	第2回試験	第3回試験	第4回試験	第5回試験
適切選択	127題	123題	115題	115題	127題
不適切選択	27題	31題	39題	39題	27題

※適切選択…「正しいものを選びなさい」「最も適切なものを選びなさい」などの形式。
 ※不適切選択…「誤っているものを選びなさい」「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

- 午前・午後ともに一般問題58題のあとに19題の事例問題という構成。つまり、一般問題は午前と午後合わせて $58 \times 2 = 116$ 題、事例問題は午前と午後合わせて $19 \times 2 = 38$ 題となる。1つ1つの事例の文章の長さは10行前後。

表3 一般問題・事例問題比較

	第1回本試	第2回試験	第3回試験	第4回試験	第5回試験
一般問題	116題	116題	116題	116題	116題
事例問題	38題	38題	38題	38題	38題

- 第5回試験の配点予想は表4の通り。これまでと同様に一般問題1点・事例問題3点という配点ならば230点満点。のちほど触れるが、難易度は第2回・第3回試験に近いものであったため、合格ラインは第3回試験までと同様138点(60%)と予想される。(なお、第4回試験は合格発表時に合格ラインが143点(62.2%)と発表された)

表4 予想配点

	配点	問題数	総得点
一般問題	1点	116題	116点
事例問題	3点	38題	114点
合計	—	154題	230点

2. ブループリントとの対応（1）

第5回試験の全ての問題について、どの大項目に相当するか判定し、まとめたものが以下の表5である（各問題の判定は、巻末資料を参照）。

表5 ブループリント大項目の分類比較

	内容	出題数	公表出題数	比較
①	公認心理師としての職責の自覚	10 題	13.9 題 (9%)	▼ 3.9
②	問題解決能力と生涯学習			
③	多職種連携・地域連携			
④	心理学・臨床心理学の全体像	2 題	4.6 題 (3%)	▼ 2.6
⑤	心理学における研究	7 題	3.1 題 (2%)	△ 3.9
⑥	心理学に関する実験	2 題	3.1 題 (2%)	▼ 1.1
⑦	知覚及び認知	2 題	3.1 題 (2%)	▼ 1.1
⑧	学習及び言語	3 題	3.1 題 (2%)	▼ 0.1
⑨	感情及び人格	3 題	3.1 題 (2%)	▼ 0.1
⑩	脳・神経の働き	3 題	3.1 題 (2%)	▼ 0.1
⑪	社会及び集団に関する心理学	3 題	3.1 題 (2%)	▼ 0.1
⑫	発達	8 題	7.7 題 (5%)	△ 0.3
⑬	障害者（児）の心理学	3 題	4.6 題 (3%)	▼ 1.6
⑭	心理状態の観察及び結果の分析	9 題	12.3 題 (8%)	▼ 3.3
⑮	心理に関する支援	16 題	9.2 題 (6%)	△ 6.8
⑯	健康・医療に関する心理学	13 題	13.9 題 (9%)	▼ 0.9
⑰	福祉に関する心理学	11 題	13.9 題 (9%)	▼ 2.9
⑱	教育に関する心理学	13 題	13.9 題 (9%)	▼ 0.9
⑲	司法・犯罪に関する心理学	9 題	7.7 題 (5%)	△ 1.3
⑳	産業・組織に関する心理学	7 題	7.7 題 (5%)	△ 1.3
㉑	人体の構造と機能及び疾病	7 題	6.2 題 (4%)	△ 0.8
㉒	精神疾患とその治療	11 題	7.7 題 (5%)	△ 3.3
㉓	公認心理師に関する制度	8 題	9.2 題 (6%)	▼ 1.2
㉔	その他	2 題	3.1 題 (2%)	▼ 1.1

※各問題がどの大項目に相当するかの判定については、河合塾 KALS 独自の判定であり、日本心理研修センターより発表されたものではない。複数の領域にまたがる問題は、問題の並びやブループリントに記載のキーワードが問題文や選択肢文中にあるか否かを判定基準とした。

注目点としては「大項目⑤ 心理学に関する研究」「大項目⑬ 心理に関する支援」と「大項目⑳ 精神疾患とその治療」の出題の多さである。特に大項目⑬や⑳が多かったことによる影響は、14 ページ以降の分野別講評で詳しく紹介したい。

また、心理検査を中心として注目されることが多い「大項目⑭ 心理状態の観察及び結果の分析」については、出題数が少なかった。特に、例年受験生を悩ませる心理検査のカットオフ値に関する出題は一切なかった。カットオフ値について十全な対策をして臨んだ受験生にとっては、肩透かしの結果になったかもしれない。

一方で、公認心理師法をはじめとした「大項目①～③ 公認心理師の職責」も出題数は多くなかった。特に公認心理師法に関係した問題は1題（問120）だけであった。公認心理師法に関連する出題は回を重ねるごとに出題数が減少傾向にあり（第4回試験も1題のみ）、「対策すれば点数を稼ぎやすい分野」と言われることが多かったが、ここで点数を稼ぐという発想はもはや通用しないのかもしれない。

3. ブループリントとの対応（2）

第5回試験直後、特にSNSを中心に「初見の問題が多かった」「見たことがないキーワードばかりだった」という声が散見された。たしかに、過去の公認心理師試験で多く出題されていたピアジェやエリクソンの発達理論は出題されなかった。前述したように、例年出題されている心理検査のカットオフ値に関する問題は、今回は一切出題されなかった。

そして何よりも、全ての問題を「見たことがない」と錯覚してしまうほど、強烈なインパクトを与えた「問1」の存在は、今回の試験の目玉と言って良いだろう。

問1 個人情報の保護に関する法律における「要配慮個人情報」に該当するものを1つ選べ。

- ① 氏名 ② 掌紋 ③ 病歴 ④ 生年月日 ⑤ 基礎年金番号

緊張が最高潮に達する試験開始直後。意気揚々とページを開き、試験に挑む受験生を、最速で置き去りにしていったこの問1。本当に、今自分が開いた試験は、公認心理師試験なのか…？ 試験開始直後、ページをめくる音がどこからも聞こえず、まるで時間が止まったような感覚に陥ったという声も聞く。そして、問1のショックから立て直そうとしても、序盤から解答困難な問題が続く。問1の圧倒的な初頭効果により「見たことがない問題ばかりだ」「これまで学んできたことは、無駄だったのでは」といった想いに囚われてしまった受験生は、院卒・現任者問わず、数多くいたのではないだろうか。

では、改めて客観的かつ冷静に振り返ってみたとき、今回の第5回試験は「見たことがない問題ばかり」「過去問にない問題ばかり」だったのだろうか。例えば、今回の出題内容を公認心理師試験の出題基準“ブループリント”に記載されているキーワードと照らし合わせると、どの程度マッチするのであろうか。

そこで、第5回試験の一般問題（問1～問58、問78～問135）の問題文に、ブループリントに記載の小項目キーワードが直接記載されているものを、以下の（例）のように抽出した。

（例）問2 心理支援におけるスーパービジョンにおいて、最も適切なものを1つ選べ。

（ブループリント）

2 問題解決能力と生涯学習	(1) 自己課題発見と解決能力	・心理職のコンピテンシー
	(2) 生涯学習への準備	・心理職の成長モデル ・スーパービジョン

＜ブループリント記載のキーワードの直接的出題（一般問題）＞

- | | |
|-----------------------|---------------------------------|
| ◇ スーパービジョン（問 2） | ◇ 中枢神経系（問 88） |
| ◇ 重回帰分析（問 6） | ◇ ストレングス（問 91） |
| ◇ 観察法（問 7） | ◇ 関与しながらの観察（問 92） |
| ◇ ディスレクシア（問 9） | ◇ 質問紙法（問 93） |
| ◇ 遂行機能障害（問 12） | ◇ 動機づけ面接（問 95） |
| ◇ 注意欠如多動症（問 15） | ◇ 知的障害（問 99） |
| ◇ Caplan の予防モデル（問 20） | ◇ 素行症/素行障害（問 100） |
| ◇ 障害受容（問 21） | ◇ 職場のメンタルヘルス対策（問 102） |
| ◇ 認知症の行動・心理症状（問 23） | ◇ 難病（問 105） |
| ◇ ハラスメント（問 26） | ◇ 向精神薬（問 108） |
| ◇ 精神保健福祉法（問 33） | ◇ 児童虐待防止法（問 109） |
| ◇ 低出生体重児（問 35） | ◇ インフォームド・コンセント（問 116） |
| ◇ 生物心理社会モデル（問 38） | ◇ 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（問 118） |
| ◇ 緩和ケア（問 40） | ◇ 心理教育（問 119） |
| ◇ 合理的配慮（問 45） | ◇ 自殺予防（問 123） |
| ◇ 母子保健法（問 46） | ◇ いじめ防止対策推進法（問 124） |
| ◇ 学生相談（問 49） | ◇ 心理職のコンピテンシー（問 125） |
| ◇ 安全文化（問 50） | ◇ 地域包括ケアシステム（問 126） |
| ◇ ナラティブ・アプローチ（問 53） | ◇ 共感的理解（問 128） |
| ◇ コミュニティ・アプローチ（問 54） | ◇ 軽度認知障害<MCI>（問 132） |
| ◇ 不登校（問 56） | ◇ 教育基本法（問 133） |
| ◇ いじめ（問 57） | ◇ 男女雇用機会均等法（問 135） |
| ◇ 注意（問 84） | |
| ◇ 5 因子モデル（問 87） | |

このように、多数のキーワードがブループリントから直接出題されている。事例問題や選択肢の文中の記載、間接的な出題を含めると、ブループリント関連キーワードの出題はさらに多くなる。また、社会的絆理論（問 71）、関与しながらの観察（問 92）、原因帰属に基づく声かけ（問 153）など、過去問と類似した問題もたしかに出題されている。

以上のことから、第 5 回試験もこれまでの試験と同様、ブループリントと過去問を軸に作問されていることは間違いない。もちろん、ブループリントに全く記載のないキーワードも出題されている。だが、全ての問題が「見たことがない」ということはないだろう。前述し

た問1のショックから、どれだけ立て直せたか（なお、問1の正否はおそらく合否に影響しない。しかし、そのショックをどこまで引きずってしまったかは、大きな差になっている）、見たことがある問題をどれだけ確実に得点することができたかが、今回の合否を分けるポイントになったであろう。

だが、「見たことがある」というだけでは解けない問題が多かったことも、今回の試験の特徴と言える。例えば、以下の問題を紹介しよう。

問 87 パーソナリティの5因子モデルのうち、開放性に関する語群として、最も適切なものを1つ選べ。

- ① 寛大な、協力的な、素直な
- ② 怠惰な、無節操な、飽きっぽい
- ③ 陽気な、社交的な、話し好きな
- ④ 悩みがち、動揺しやすい、悲観的な
- ⑤ 臨機応変な、独創的な、美的感覚の鋭い

パーソナリティの5因子モデルの存在は知っている。5因子が「外向性」「調和性」「勤勉性」「開放性」「神経症傾向」であることも知っている。しかし、それぞれの因子の特徴は、理解していただろうか。「開放性」とは何か、理解できていただろうか。「開放性」という文字列だけから、開放的な言葉が並ぶ選択肢③を選びはしなかっただろうか。

なお、問87の正解は⑤と思われる。5因子モデルにおける開放性は通称「経験への開放性」と呼ばれ、知的好奇心や様々な興味に開かれた姿勢のことを指す。

上記で紹介した問87に限らず、第5回試験は用語名の丸暗記で対応することが難しく、意味を理解していなければ解けない問題が多く出題されていた。そのような観点で見ると「過去問にただ取り組んだだけ」では、対応できなかったであろう。

まるで圧迫面接のような問1のショックから立て直し、学んだことがある内容を何とか見つけたい。しかしそんな時、過去問の内容やブループリントのキーワードについて、自分なりに意味を咀嚼し、理解し、活きた知識にまで仕上げていなければ、学んだことがある内容をどこにも見つけられない…！ 第5回試験は、そんな過酷な試験だったのかもしれない。

4. 問題の難易度（総論）

第5回試験の各設問の難易度を以下の3段階で判定した。なお、この判定基準および、各設問の難易度の判定は河合塾 KALS 独自のものであり、日本心理研修センターが発表したものではない。

- ◇ 難易度A…5つの中から完全にランダムで選ばざるを得ない難問。
- ◇ 難易度B…正解の選択肢を2つまたは3つまで絞り込むことが出来る問題。
- ◇ 難易度C…比較的正確な正解を1つに絞り込みやすい問題。

※上記の基準で難易度判定をしているため、キーワードとして難しい内容であったとしても明らかに不正解の選択肢を除外して2択（3択）で勝負できるなら難易度B、選択肢の中に難しい内容があったとしても、明らかに正しいと判断できる選択肢が1つあるならば難易度Cと判定している。

以上の基準で第5回試験全154題の判定を行った。その集計結果が以下の表6である（各問題の判定については本資料の巻末参照）。

表6 問題の難易度（第5回試験）

難易度	午前	午後	全体
A	11題 14.3%	12題 15.6%	23題 14.9%
B	33題 42.9%	37題 48.1%	70題 45.5%
C	33題 42.9%	28題 36.4%	61題 39.6%

前述の通り、問1の圧倒的なインパクトにより、午前の方が難しく感じた受験生もいるかもしれないが、問題ごとに分析していくと午後の方がやや難しいとわかる。特に目立つのがB問題の多さである。B問題は「何となく答えを書いたものの、どこか自信を持ってない」という問題であり、午後の試験疲れも重なって、集中力とモチベーションを保ちながら試験に取り組むことは、決して容易なことではなかったであろう。

次に、一般問題と事例問題の難易度を以下の表7で比較する。

表7 一般問題と事例問題の難易度比較（第5回試験）

難易度	一般	事例	全体
A	19題 16.4%	4題 10.5%	23題 14.9%
B	57題 49.1%	13題 34.2%	70題 45.5%
C	40題 34.5%	21題 55.3%	61題 39.6%

第5回試験の事例問題を見ると、C問題が55.3%とかなり多いように見えるが、実は第4回試験の事例問題はC問題が63.2%もあり、比較すると減少している。

また、問題の難易度だけでなく、過去問と比較して「事例文が長い気がした」「事例の読み取りが大変だった」「事例を解くのに時間がかかった」という受験生もいたであろう。以下の図は、第4回試験と第5回試験で「事例問題の行数」を比較したものである。（なお、事例問題の行数は、事例文+問題文でカウントしており、選択肢の行数はカウントしていない）

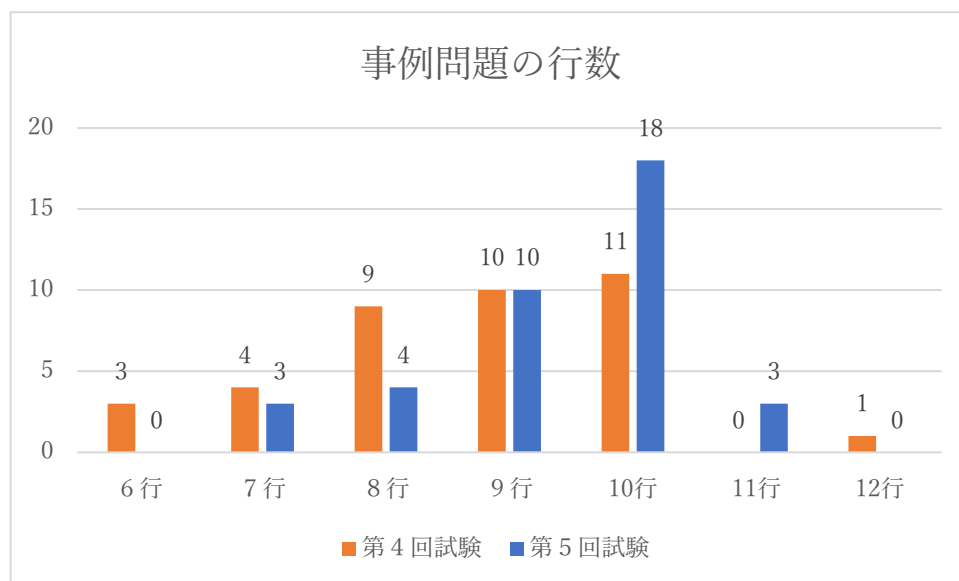


図1 事例問題の行数（第4回試験と第5回試験の比較）

※グラフ上部の値は出題数

上図から、第5回試験の事例問題は、明らかに文章量が多かったことが見てくるだろう。文章量が多いということは、情報量が多いということでもあり、解くのに時間がかかる、ということでもある。公認心理師試験は「事例問題で稼ぐことが重要」と言われていたが、今回の試験は事例問題で点数を稼ぐことがやや難しかったと言えるだろう。

(参考) 一般問題と事例問題の難易度比較 (第4回試験)

難易度	一般	事例	全体
A	21 題 18.1%	2 題 5.3%	23 題 14.9%
B	48 題 41.4%	12 題 31.6%	60 題 39.0%
C	47 題 40.5%	24 題 63.2%	71 題 46.1%

次に、以下の設定で行った得点シミュレーションを紹介する。

- ・第5回試験の配点を従来と同様、一般問題1点・事例問題3点と想定。
- ・難易度A問題は、正解率20% (多くが五肢択一のため、正解率5分の1と想定)
難易度B問題は、正解率50% (選択肢を2つまで絞り込めたと想定)
難易度C問題は、正解率80% (ミスしなければ正解できると想定) とする。

表8 得点シミュレーション

種別	難易度	第5回試験	
		問題数	予想得点
一般問題 (1点)	A (×0.2)	19 題	3.8 点
	B (×0.5)	57 題	28.5 点
	C (×0.8)	40 題	32.0 点
事例問題 (3点)	A (×0.2)	4 題	2.4 点
	B (×0.5)	13 題	19.5 点
	C (×0.8)	21 題	50.4 点
予想得点		136.6 点	

表8によれば、第5回試験において難易度C問題を確実に得点し、難易度B問題を二択まで絞り込めれば、難易度A問題が完全に運任せでも136.6点となる。合格ラインを138点(60%)と考えた場合、あと2・3問上乘せすれば合格ラインに届く事になる。難易度C問題をより確実に得点し、難易度B問題で二択に絞り込んだ後の正解率を50%以上に上げることができれば、より安定して合格ラインに乗ることができるだろう。

よって、難易度A問題ではなく、難易度B問題・難易度C問題でいかに得点を稼ぐことができるかが、合格の決め手になる。これは、第4回試験までと変わらず、公認心理師試験に一貫した特徴と言える。

これまで述べてきたように第5回試験は、問1から始まる強烈なインパクトがあり、かなり心揺さぶる試験であったことは間違いないが、問題が進むにつれて「何となく自信が持てる問題が増えてきた」という感想を持った受験生もいたのではないだろうか。

実はその要因は、以下の表9にあるかもしれない。

表9 解答形式別 難易度比較 (第5回試験)

難易度	5肢択一	4肢択一	5肢択二
A	21題 17.6%	0題 0.0%	2題 9.5%
B	56題 47.1%	6題 42.9%	8題 38.1%
C	42題 35.3%	8題 57.1%	11題 52.4%

公認心理師試験は、5肢択一から始まり、4肢択一、5肢択二へと続いていく。実は今回の第5回試験に関しては、難易度 A 問題の大半は最初に出題される5肢択一に集中していた。そして、4肢択一・5肢択二は難易度 C 問題の割合がかなり多かった。そのため、問題を解き進めるにつれて、少しずつ「解ける」という実感を取り戻すことができた受験生もいたであろう。特に今回の試験で、本来ならば正解することが難しい5肢択二を、比較的取り組みやすく感じた受験生は、ある程度“自分”を取り戻すことができていたのかもれない。

5. 問題の難易度（各回比較）

第5回試験の難易度を、第4回試験までと比較した。それが以下の表10である。また、難易度の推移をグラフに表したものが図2である。

表10 各回別の難易度比較

難易度	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
A	9題 5.8%	25題 16.2%	26題 16.9%	23題 14.9%	23題 14.9%
B	81題 52.6%	67題 43.5%	66題 42.9%	60題 39.0%	70題 45.5%
C	64題 41.6%	62題 40.3%	62題 40.3%	71題 46.1%	61題 39.6%

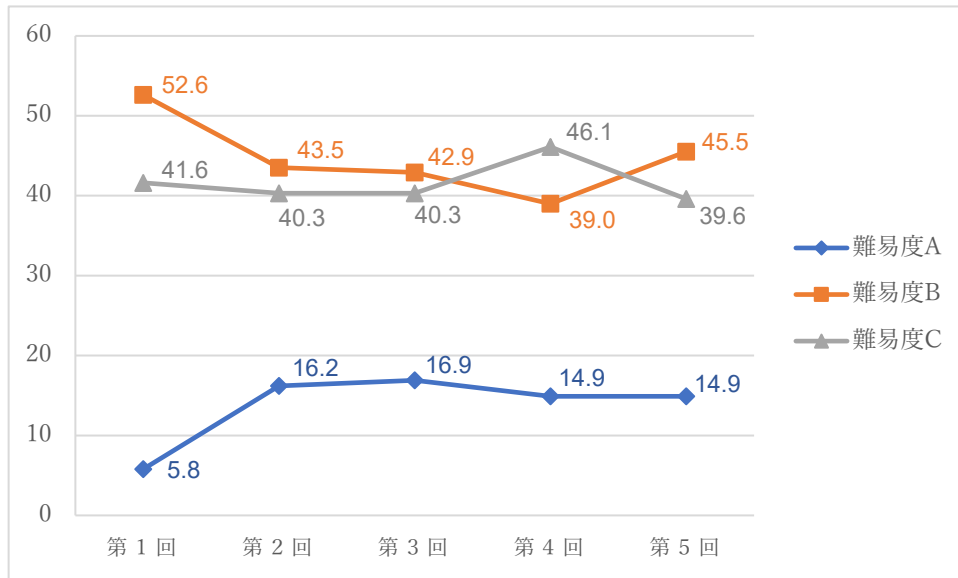


図2 公認心理師試験 各回の難易度推移

難易度推移からも、難易度B問題の多さが目立つ。また、難易度C問題はこれまでと変わらないレベルで推移しているとはいえ、初めて40%を下回る結果となった。そして実は難易度A問題について、出題数はあまり変化していない。

今回の第5回試験の“難しさ”は、実は難易度Aのような“解答困難な問題による難しさ”ではなく、難易度B問題による“答えを決めきれない難しさ”であることが見えてくる。自信を持って答えやすい難易度C問題が少ないことも、上記のことに拍車をかけることだろう。

なお、10 ページで行なっている得点シミュレーションについて、各回を比較したものが以下の表 11 である。

表 11 得点シミュレーション 各回比較

	第 1 回本試	第 2 回試験	第 3 回試験	第 4 回試験	第 5 回試験
予想得点	140.5 点	138.7 点	139.6 点	142.6 点	136.6 点

※予想得点…一般問題 1 点，事例問題 3 点とし，難易度 A 問題を 2 割，B 問題を 5 割，C 問題を 8 割正解していた場合の得点のこと。算出方法の詳細は本資料 10 ページを参照。

第 2 回試験・第 3 回試験と比較して事例問題で点数を取ることが難しくなっていることもあり，これまでの試験と比較すると第 5 回試験が最も予想得点が低くなっている。とはいえ，極端に予想点数が低いわけでもない。このことから，今回の試験においては，合格ラインは例年通り 138 点（60%）になるのではないかと予想される。（もちろん実際にどうなるかは，合格発表の日までわからない）

（補足）問題に記載されている“人名”について。

第 5 回試験の特徴として，“人名”が記載されている問題が多かった。もちろん“人名”を知っていることが有利に働いたり，“人名”を知っていなければ解けなかったりする問題もあるが，全ての問題が“人名”を理解していないと解けないわけではない。

問 19 T.Holmes らの社会的再適応評価尺度において，LCU 得点<Life Change Unit Score>が最も高く設定されているライフイベントを 1 つ選べ。

- ① 親友の死 ② 近親者の死 ③ 配偶者の死
- ④ 本人の怪我や病気 ⑤ 経済状態の大きな変化

上記の問題は，人名を知らなくても解答可能である。このとき人名は，「他の研究者の理論によれば，○○という点も指摘されている！」という指摘を防いだり，国家試験として答えを 1 つに確定させたりする役割を果たしている。公認心理師試験で，回を重ねるごとに人名が“添えられている”ことが多くなっているのは，このような観点もあるのだろう。

6. 出題分野別の講評

第5回公認心理師試験について「心理検査」「介入・技法」「症状・障害」「法律・制度・施設」の4つの観点から、多く出題されたキーワードの紹介と共に分野別の講評を述べる。

※注 出題回数のカウント方法

問題文（事例文や注意書き含む）、選択肢中に記載されたキーワードを集計。1つの問題に同じキーワードが複数回あった場合は、1つとカウントする。例えば問題文中に「抑うつ」とあり、同じ問題の選択肢に「抑うつ」とあったとしても、1つとしてカウントする。異なる問題、異なるキーワードであれば区別してカウントする。

A. 心理検査に関する出題

心理検査は、大項目⑭に該当する。以下の表12は、問題文・選択肢中に心理検査の名称が示された回数である。回数のカウント方法は、上記注を参照。例えば、第5回試験の問61は、①AQ-J、②CAARS、③CAT、④NEO-PI-R、⑤WISC-IVと5つの検査名が示されているため「5回」とカウントしている。

表12 問題文・選択肢中に心理検査の名称が示された回数

第1回本試	第2回試験	第3回試験	第4回試験	第5回試験
22回	50回	21回	16回	31回

次に、第5回試験で出題された心理検査をまとめた表が、以下の表13である。

表13 第5回試験で出題された心理検査

回数	検査名
2回	BDI-II, WISC-IV, AQ-J, IES-R, CAARS
1回	WAIS, 田中ビネー知能検査, KABC-II, LSAS-J, MAS, Vineland-II, CAPS, NEO-PI-R, STAI, TEG, MMPI, CDR, DN-CAS 認知評価システム, 文章完成法, GHQ, CAT, JDDST-R, MoCA-J, POMS, グッドイナフ人物画検査, 社会的再適応評価尺度

※太字の検査は、過去の試験で出題されたことのある検査。

表 12 を見て、第 5 回試験において心理検査の出題回数が多かったことを意外に思う人がいるかもしれない。出題回数だけ見ると確かに多いように見えるが、「カットオフ値に関する問題が出題されなかった (=検査結果が数値で示されている事例がなかった)」「出題された検査の大半が、過去に出題された検査であった」という 2 点から、心理検査に関する負担感が少なかったのであろう。事実、表 13 で示されている検査の大半は過去の公認心理師試験で出題された検査である（しかも、初出の検査は MoCA-J を除き正答に影響しない）。

多様な心理検査やカットオフ値の理解に尽力した者は肩透かしを感じたかもしれないが、何かと“難しい”という話題が飛び交う第 5 回試験において「もし未知の心理検査が多数出題されたら…?」「カットオフ値に関する理解がなければ解けない事例問題が出題されていたら…?」と考えると、今回はこれで良かったのかもしれない。

なお、2022 年 2 月にウェクスラー式検査の最新版 WISC-V の日本語版が発売されたが、第 5 回試験では WISC-IV として出題された。

B. 介入・技法に関する出題

介入・技法は大項目⑤に該当する。第 2 回・第 3 回試験では出題数が少なかったが、第 4 回試験ではまる介入・技法を 5 つの選択肢の中から選ぶ問題が多くなり、第 5 回試験でも（第 4 回試験ほどではないが）同様の出題が多く見られた（問 18, 問 37, 問 66, 問 77, 問 127）。過去の試験との比較は、以下の表 14 の通りである。

表 14 問題文・選択肢中に介入・技法の名称が示された回数

第 1 回本試	第 2 回試験	第 3 回試験	第 4 回試験	第 5 回試験
52 回	31 回	32 回	49 回	45 回

（参考） あてはまる介入・技法を選択肢の中から選ぶ問題

問 37 うつ病に対する認知行動療法の主な技法として、不適切なものを 1 つ選べ。

- ① 認知再構成法 ② 問題解決技法 ③ 活動スケジュール
 ④ 持続エクスポージャー法 ⑤ ソーシャル・スキルズ・トレーニング<SST>

第5回試験で出題された介入・技法に関する用語をまとめた表が、表15である。やはりこれまでの公認心理師試験で頻出のキーワードが多く出題されている。特に、公認心理師の業務の1つであり、心理学的な情報提供である「心理教育」について、多く出題されていた。また「認知行動療法」「リラクゼーション法」「関与しながらの観察」は、これまでの公認心理師試験でほぼ皆勤賞の頻出キーワードであり、今回の試験でも出題されていた。

これまでの公認心理師試験で多く出題されていた「インテーク面接（初回面接）」「司法面接」については、今回は出題がなかった。特に、従来の試験と比較して初期対応を問う問題は減少傾向にある。

表15 第5回試験で出題された介入・技法に関する用語

回数	用語名
4回	心理教育
2回	動機づけ面接, ソーシャル・スキルズ・トレーニング(SST), セルフ・モニタリング, 自律訓練法, コンサルテーション, ナラティブ・アプローチ
1回	認知行動療法, リラクゼーション法, 関与しながらの観察, アサーション・トレーニング, プレイセラピー (遊戯療法), トークン・エコノミー法, 漸進的筋弛緩法, クライアント中心療法, 森田療法, ピアカウンセリング, アクセプタンス&コミットメント・セラピー, 問題解決技法, リアリティ・オリエンテーション, 心理的デブリーフィング, ジョイニング, TEACCH, 集団療法, リービングケア, マイクロカウンセリング, 認知リハビリテーション, 認知再構成法, スモールステップ, 睡眠スケジュール法, 持続エクスポージャー, シェイピング, コミュニティ・アプローチ, 活動スケジュール, 回想法, 親子並行面接

※太字は、特に過去の試験で特に出題が多かった用語。

C. 症状・障害に関する出題

症状・障害は大項目②に該当する。第5回試験で出題された症状・障害に関する用語をまとめたものが以下の表16である。過去の試験で累計4回以上の出題があるものを太字にした。やはり、過去の試験で多く出題されている症状・障害が、第5回試験でも多く出題されている。

特に第5回試験では、事例文から予想される症状・障害を選ぶ問題が多く見られた。例えば問64の場合、事例文の内容から①不安症、②統合失調症、③過敏性腸症候群、④起立性調節障害、⑤自閉スペクトラム症のいずれかを選択する。このような問題が問64だけでなく、問65、問68、問138、問143、問144、問151で出題された。このような問題を解くためには、ただ症状・障害の名前を知っているだけでなく、その症状・障害がどのような特徴を持っているのか、具体的な臨床像と共にイメージできることが必要となる。やはりこのような点からも、やはり第5回試験では、表面的な知識ではなく、中身を伴った「理解」が求められていたことがわかる。

表16 第5回試験で出題された症状・障害に関する用語

回数	用語名
7回	うつ病（うつ状態・抑うつ）
4回	発達障害
3回	Alzheimer型認知症、強迫症（強迫観念・強迫行為）、自閉スペクトラム症、前頭側頭型認知症、知的障害（知的能力障害）、統合失調症
2回	認知症、心的外傷後ストレス障害（PTSD）、依存、前向き健忘、不安症、がん、パニック発作、運動能力障害
1回	（※1回のみ出題の用語は、過去の試験で出題があった用語のみ掲載） 注意欠如多動症（AD/HD）、糖尿病、Lewy小体型認知症、素行症（素行障害）、双極性障害、反応性アタッチメント障害、ディスレクシア、感染症、限局性学習症（学習障害）、けいれん、ストレス反応、観念奔逸、高次脳機能障害、常同行動遂行機能障害、BPSD、トラウマティック・ボンディング、るい瘦、下痢、過敏性腸症候群<IBS>、回避反応、眼球突出、傾眠、欠伸発作、侵入症状、心気妄想、正常圧水頭症、不眠、全般性不安症、統合失調型パーソナリティ障害、反跳性不眠、複雑性PTSD、離人感

※太字は、特に過去の試験で特に出題が多かった用語である。

※問題文や選択肢中に明記されている用語のみをまとめている。例えば、事例文の内容が明らかに「うつ」が疑われる内容であったとしても、事例文または選択肢の中に「うつ」という言葉が出て来なければ回数にはカウントしていない。

※事例文と選択肢の両方に「うつ」という言葉が出てくるなど、同じ問題で複数回示されている場合は、それらをまとめて1回分としてカウントしている。

これまで多く出題されている「うつ病」「統合失調症」「発達障害」「認知症」「自閉スペクトラム症」「ADHD」「PTSD」が、第5回試験でも多く出題されていた。対して、従来の試験で多く出題されていた「境界性パーソナリティ障害」「神経性やせ症」の出題がなかった。

D. 法律・制度・施設に関する出題

法律・制度・施設は大項目②が該当する。第5回試験で出題された法律・制度・施設をまとめたものが以下の表17である。こちらも、過去の試験で累計4回以上の出題があるものを太字にした。

表17 第5回試験で出題された法律・制度・施設

回数	用語名
3回	児童養護施設
2回	合理的配慮 、障害者権利条約
1回	(※1回のみ出題の用語は、過去の試験で出題があった用語のみ掲載) ストレスチェック制度 、 児童相談所 、 精神保健福祉法 、 医療保護入院 、 いじめ防止対策推進法 、 個人情報保護 、 児童虐待防止法 、 少年院 、 要保護児童対策地域協議会 、 里親委託 、 応急入院 、 教育基本法 、 精神障害者保健福祉手帳 、 措置入院 、 男女雇用機会均等法 、 乳児院 、 緊急措置入院 、 就労移行支援 、 就労継続支援B型 、 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律 、 心の健康問題により休業した労働者の職場復帰支援 、 精神保健福祉センター 、 地域包括支援センター 、 任意入院 、 情状鑑定

※太字は、特に過去の試験で出題が多かった用語である。

問1で出題された個人情報保護に関する法律の問題にインパクトはあったが、実は第5回試験を全体として見ると、法律・制度・施設に関するマニアックな問題は少なく、出題された法律や制度・施設を知らないと全く解けないという問題は、決して多くなかった。

これまでの過去問で多く出題されていた「医療観察法」に関する問題はなく、「少年法」に関する問題(問58)も、2022年4月の法改正で新たに誕生した“特定少年”ではなく、触法少年に関する問題であった。また「公認心理師法」についても直接的な出題はなく、資格が取り消される事項に関する間接的な出題(問120)であった。

7. 総評

今年の公認心理師試験は、特にGルートで受験可能な最後の年ということで、並々ならぬ緊張感を持って試験準備に臨み、そして試験に挑まれた方が多かったであろう。仕事や家庭と並行して勉学を進めるだけでも十分に困難である上に、濃厚接触者や陽性者になることで受験の機会を奪われてしまうことから、体調管理や衛生管理にも気を配らなければならず、積み重なるその重圧、心労は測りしれないものがあったであろう。中には、公認心理師試験に向けて受験準備を進めたものの、断腸の思いで受験を断念した方もいると聞く。

多くの方が、様々な思い、様々な願いを込めてこの試験に臨み、挑んだ。まずその姿勢に、最大限の敬意を送りたい。

そして願わくは、合否に関係なく、今後も心理学の世界を味わい、楽しんでいただきたい。心理学の世界には、様々な側面が、様々な魅力がある。人はどのように世界を見て、世界を感じるのか、それを明らかにしようとする知覚や認知の心理学。人が何を得て、何を失うのか、その過程にどのようなメカニズムがあるのかを明らかにしようとする学習の心理学。生まれてから死に至るまで、人はどのような変化をたどり、何に出会い、何と向き合いながら、豊かな人生を送っていくのかを見届けていく発達心理学。他者との関わりの中で、集団だからこそ生じてしまう心と行動の変化に注目する社会心理学。そして、人の苦しみや困難を、理論と科学で支えていく臨床心理学。他にも心理学には、たくさんの側面があり、たくさんの姿がある。

公認心理師試験に向けた試験勉強によって、みなさんは多くの「ことば」たちと出会ったであろう。単純接触効果という言葉がある。見たことがある、聞いたことがあるものには、親しみを感じやすい。だからこそ、受験を終えた今だからこそ、色々な心理学の本を読んで、試験勉強で出会ったたくさんの「ことば」たちに、ぜひ会いに行っておいてほしい。

「ことば」を知っている今なら、きっと今までよりも、心理学の世界を深く味わうことができる。受験が終わった今なら、きっと今までよりも気楽に、純粹に楽しむことができる。そしてその「ことば」を知っているからこそ、その世界に親しみを感じ、その世界をもっと愛することができるだろう。

みなさんは、どんな「ことば」に会いに行きたいだろうか？

きっとその「ことば」は、受験勉強では見せてくれなかった、別の豊かな側面を見せてくれる。意外な面や、裏の顔も見せてくれるかもしれない。知り合いや仲間の「ことば」も紹介してくれるかもしれない。何よりもその「ことば」は、みなさんが会いに来てくれたことを、心から喜んで、歓迎してくれるだろう。

どんな本でも構わない。ぜひ書店に足を運び、興味を持った心理学の本を、ぜひ手にとってみてほしい。新たな学びに向けた、新たな世界への第1歩を踏み出そう。

第5回までの公認心理師試験における現任者の扱いについて、様々な議論があることは承知している。その上で、敢えて言おう。今回の機会では、心理学の「ことば」が、心理学の世界が、様々な方々に向けて開かれたことは、まちがいなく大きな価値がある。多くの方々が心理学に興味を持って下さったことそのものに、この場を借りて、心から感謝したい。

公認心理師試験は新たなステージに入る。基本的に受験生は院卒生が中心になる。河合塾 KALS の講座も引き続き開講され、講談社より「赤本 2023」の発売も決定している。河合塾の WEB 通信講座で「学びの基礎」を固め、「赤本」で「ブループリントと過去問」を仕上げる。これが、河合塾 KALS が考える公認心理師試験・必勝合格への道である。さらに、定期的な情報提供や、メール質問書サービスを用いた個別対応なども実施していく。このことは、これまでも、これからも変わらない。

河合塾ならではの「講義力×情報力」に、ぜひご期待頂きたい。

2022 年度の分析速報は、以上である。かなりの長文となってしまったが、最後まで読んで頂いたことに心より感謝したい。ありがとうございました。

2022 年 7 月 19 日
河合塾 KALS

7. 巻末資料 第5回公認心理師国家試験 各設問分析

BP…ブループリント大項目の番号。

難度…問題の難易度がどの程度であったか。

- 難度A…5つの中から完全にランダムで選ばざるを得ない難問。
- 難度B…正解の選択肢を2つまたは3つまで絞り込むことが出来る問題。
- 難度C…比較的正確な正解を1つに絞り込みやすい問題。

解答形式…マークシートを塗りつぶす内容はどうか。

- 5肢択一 …5つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 4肢択一 …4つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 5肢択二 …5つの選択肢から2つを選ぶ形式。

選択内容…どのような内容を正解として答えるか。

- 適切選択…「最も適切なものを選びなさい」などの形式。
- 不適切選択…「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
1	①	個人情報の保護に関する法律	A	5肢択一	適切選択
2	②	心理支援におけるスーパービジョン	C	5肢択一	適切選択
3	③	障害者の雇用の促進及び安定のための施設	B	5肢択一	適切選択
4	④	動機づけ理論	C	5肢択一	適切選択
5	⑤	因果関係の確かさの指標	B	5肢択一	適切選択
6	⑤	重回帰分析で偏回帰係数が不安定になる状態	B	5肢択一	適切選択
7	⑥	観察法におけるチェックリスト法	A	5肢択一	適切選択
8	⑦	ヒューリスティクス	C	5肢択一	適切選択
9	⑧	ディスレクシア	C	5肢択一	適切選択
10	⑨	R.S.Lazarus らのトランスアクションナルモデル	B	5肢択一	適切選択
11	⑩	嚔下反射の中樞	A	5肢択一	適切選択
12	⑩	高次脳機能障害における遂行機能障害	C	5肢択一	適切選択
13	⑪	他者との関係のコストと報酬に関する理論	B	5肢択一	適切選択
14	⑫	前青年期における同質性を特徴とする仲間関係	B	5肢択一	適切選択
15	⑫	注意欠如多動症<AD/HD>	B	5肢択一	適切選択
16	⑭	H.Ebbinghaus と文章完成法	B	5肢択一	適切選択
17	⑭	WAIS-IV の制限時間のない下位検査	A	5肢択一	適切選択
18	⑮	自身で段階的に進める心身機能調整法	B	5肢択一	適切選択
19	⑯	LCU 得点が最も高いライフイベント	B	5肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
20	⑯	G. Caplan の予防モデルに基づく二次予防	C	5 肢択一	適切選択
21	⑰	T.Dembo と B.Wright の障害受容の理論	A	5 肢択一	適切選択
22	⑰	逆境経験に対する心理社会的適応を示す概念	C	5 肢択一	適切選択
23	⑰	認知症の行動・心理症状<BPSD>	B	5 肢択一	適切選択
24	⑱	特別な教育的支援と就学相談・就学先の決定	B	5 肢択一	適切選択
25	⑲	少年院における処遇	B	5 肢択一	適切選択
26	⑳	職場におけるパワーハラスメント	B	5 肢択一	適切選択
27	㉑	アレルギー反応によるアナフィラキシー	A	5 肢択一	適切選択
28	㉑	慢性的なコルチゾールの過剰状態に伴う症状	A	5 肢択一	適切選択
29	㉑	我が国における移植医療	B	5 肢択一	適切選択
30	㉒	DSM-5 における回避・制限性食物摂取症	A	5 肢択一	適切選択
31	㉒	月経前不快気分障害の DSM-5 カテゴリー	B	5 肢択一	適切選択
32	㉒	オレキシン受容体拮抗薬の副作用	B	5 肢択一	適切選択
33	㉓	精神保健福祉法に基づく入院形態	C	5 肢択一	適切選択
34	③	小児科における公認心理師の活動の留意点	C	5 肢択一	不適切選択
35	⑫	低出生体重児及びその発達	B	5 肢択一	不適切選択
36	⑬	身体障害者に該当しない障害種	C	5 肢択一	不適切選択
37	⑮	うつ病に対する認知行動療法	C	5 肢択一	不適切選択
38	⑮	生物心理社会モデル	C	5 肢択一	不適切選択
39	⑮	アクセプタンス&コミットメントセラピー	B	5 肢択一	不適切選択
40	⑮	緩和ケアの定義の基本的な考え方	C	5 肢択一	不適切選択
41	⑲	強制性交等罪の犯罪被害者に認められるもの	B	5 肢択一	不適切選択
42	⑲	T.Ward らのグッド・ライブス・モデル	A	5 肢択一	不適切選択
43	⑤	質的研究と関わりが深い研究・分析方法	B	5 肢択一	不適切選択
44	⑫	思春期・青年期の自傷と自殺	B	4 肢択一	適切選択
45	⑬	大学における合理的配慮	C	4 肢択一	適切選択
46	㉓	母子保健法	B	4 肢択一	適切選択
47	㉔	職場における自殺のポストベンション	C	4 肢択一	不適切選択
48	㉒	幻肢	B	4 肢択一	不適切選択
49	⑱	学生相談	C	4 肢択一	不適切選択
50	㉔	J.T.Reason の安全文化	B	4 肢択一	不適切選択
51	①	公認心理師の倫理と多重関係	C	5 肢択二	適切選択
52	③	多職種チームによる精神科デイケア	B	5 肢択二	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
53	④	ナラティブ・アプローチ	C	5 肢択二	適切選択
54	⑮	コミュニティ・アプローチ	C	5 肢択二	適切選択
55	⑰	障害者の権利に関する条約<障害者権利条約>	C	5 肢択二	適切選択
56	⑱	不登校児童生徒への支援の在り方	C	5 肢択二	適切選択
57	⑱	学校におけるいじめへの対応	B	5 肢択二	適切選択
58	⑲	触法少年	B	5 肢択二	適切選択
59	⑤	習得度の差を検討する分析法の選択	B	5 肢択一	適切選択
60	⑥	実験結果から解釈される乳児期の視覚認知機能	B	5 肢択一	適切選択
61	⑭	7 歳男児・テストバッテリーに含める心理検査	B	5 肢択一	適切選択
62	⑮	20 歳男性・相談室での初期対応	C	5 肢択一	適切選択
63	⑮	45 歳女性・作業同盟の概念に基づく対応方針	B	5 肢択一	適切選択
64	⑳	14 歳女子・事例内容に基づく状態の理解	C	5 肢択一	適切選択
65	㉑	25 歳女性・事例内容に基づく状態の理解	C	5 肢択一	適切選択
66	⑯	47 歳男性・不眠を主訴とする要支援者の対応	C	5 肢択一	適切選択
67	㉑	50 歳男性・職場復帰支援の手引きに基づく対応	B	5 肢択一	適切選択
68	㉑	78 歳女性・事例内容から考えられる病態	C	5 肢択一	適切選択
69	⑰	4 歳男児・児童養護施設入所初期の支援方針	C	5 肢択一	適切選択
70	⑱	14 歳男子・面前 DV に対する対応	C	5 肢択一	適切選択
71	⑲	15 歳男子・事例内容に適合する非行理論	C	5 肢択一	適切選択
72	㉑	23 歳男性・面接で優先的に確認すべき事項	C	5 肢択一	適切選択
73	㉑	21 歳女性・事例内容に適合する理論	A	5 肢択一	適切選択
74	⑭	29 歳男性・テストバッテリーに含める検査	C	5 肢択一	不適切選択
75	⑲	22 歳男性・情状鑑定で検討する事項	A	5 肢択一	不適切選択
76	⑱	10 歳女児・限局性学習症と初期対応	C	4 肢択一	適切選択
77	⑯	20 歳男性・再発予防に有用な支援	C	5 肢択二	適切選択
78	①	虐待への対応	B	5 肢択一	適切選択
79	③	高齢者福祉領域で働く公認心理師の業務	C	5 肢択一	適切選択
80	⑤	性格特性理論の基盤となっている統計手法	C	5 肢択一	適切選択
81	⑨	感情の機能	A	5 肢択一	適切選択
82	⑤	質的研究の分析結果の妥当性を高める方法	A	5 肢択一	適切選択
83	⑤	無作為抽出の方法	A	5 肢択一	適切選択
84	⑦	注意の抑制機能に関連する現象	B	5 肢択一	適切選択
85	⑧	特定の鍵刺激に誘発される固定的動作	A	5 肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
86	⑧	行動の学習	B	5 肢択一	適切選択
87	⑨	5 因子モデルのうち開放性に関する語群	B	5 肢択一	適切選択
88	⑩	中枢神経系の保護と代謝	A	5 肢択一	適切選択
89	⑪	実験結果を説明する心理学概念	B	5 肢択一	適切選択
90	⑫	J.J.Arnett が提唱した発達期	A	5 肢択一	適切選択
91	⑮	C.A.Rapp が提唱したストレングスモデル	B	5 肢択一	適切選択
92	⑭	関与しながらの観察	B	5 肢択一	適切選択
93	⑭	質問紙法による心理検査の説明	A	5 肢択一	適切選択
94	⑭	心理アセスメント	C	5 肢択一	適切選択
95	⑮	動機づけ面接	B	5 肢択一	適切選択
96	⑯	ストレス下で副腎皮質から分泌されるホルモン	B	5 肢択一	適切選択
97	⑯	依存症者の家族や友人の自助グループ	B	5 肢択一	適切選択
98	⑯	タイプ C パーソナリティ	B	5 肢択一	適切選択
99	⑰	知的障害児の適応行動の評価	C	5 肢択一	適切選択
100	⑰	DSM-5 における素行症/素行障害	B	5 肢択一	適切選択
101	⑳	発達障害者が一般就労を行う時のサービス	B	5 肢択一	適切選択
102	⑳	職場のメンタルヘルス対策	C	5 肢択一	適切選択
103	㉒	DSM-5 における身体症状症	B	5 肢択一	適切選択
104	㉑	Basedow 病の症状	B	5 肢択一	適切選択
105	㉑	難病法による指定難病	B	5 肢択一	適切選択
106	㉑	インスリン治療中の糖尿病患者の初期症状	A	5 肢択一	適切選択
107	㉒	強迫症の症状	B	5 肢択一	適切選択
108	㉒	向精神薬の抗コリン作用による副作用	C	5 肢択一	適切選択
109	㉓	児童虐待防止法	B	5 肢択一	適切選択
110	㉓	労働安全衛生規則に定められた産業医の職務	B	5 肢択一	適切選択
111	⑯	A.R.Jonsen の臨床倫理の 4 分割表	B	5 肢択一	不適切選択
112	⑮	A.E.Ivey と M.Ivey のマイクロカウンセリング	B	5 肢択一	不適切選択
113	⑫	生後 1 年目までにみられる社会情動的発達	B	5 肢択一	不適切選択
114	⑫	E.Kubler-Ross の死に対する心理的反応段階	C	5 肢択一	不適切選択
115	㉒	DSM-5 の躁病エピソード	C	5 肢択一	不適切選択
116	⑮	インフォームド・コンセント	C	5 肢択一	不適切選択
117	⑱	スクールカウンセラーの児童生徒理解	C	5 肢択一	不適切選択
118	㉓	障害を理由とする差別の解消に関する法律	B	5 肢択一	不適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
119	㉔	ストレスマネジメントに関する心理教育	C	5 肢択一	不適切選択
120	①	公認心理師の登録が取り消される場合	C	4 肢択一	適切選択
121	⑭	BDI-II	B	4 肢択一	適切選択
122	⑱	児童生徒の自殺が発生した学校への緊急支援	C	4 肢択一	適切選択
123	㉔	高等学校における自殺予防教育	C	4 肢択一	適切選択
124	㉓	いじめ防止対策推進法	C	4 肢択一	不適切選択
125	②	心理職の基盤的コンピテンシー	B	5 肢択二	適切選択
126	⑮	地域包括ケアシステム	C	5 肢択二	適切選択
127	⑮	リラクセーションを主な目的とする技法	C	5 肢択二	適切選択
128	⑮	クライアント中心療法における共感的理解	B	5 肢択二	適切選択
129	⑯	睡眠時無呼吸症候群	C	5 肢択二	適切選択
130	⑰	我が国の里親制度	A	5 肢択二	適切選択
131	⑰	認知症の人の意思決定支援	C	5 肢択二	適切選択
132	⑰	軽度認知障害<MCI>	B	5 肢択二	適切選択
133	㉓	教育基本法で新たに規定された事項	B	5 肢択二	適切選択
134	⑰	受刑者に対して行われる特別改善指導	A	5 肢択二	適切選択
135	㉓	男女雇用機会均等法	B	5 肢択二	適切選択
136	⑪	15 歳男子・家族システム論に基づく説明	B	5 肢択一	適切選択
137	⑫	20 歳女子・事例内容に該当する用語	B	5 肢択一	適切選択
138	⑬	7 歳女子・診断基準から考えられる病態	C	5 肢択一	適切選択
139	⑭	23 歳女性・心理的アセスメント	C	5 肢択一	適切選択
140	⑮	I.D.Yalom の集団療法の概念	A	5 肢択一	適切選択
141	㉔	17 歳男子・事例内容に基づく公認心理師の対応	C	5 肢択一	適切選択
142	⑯	45 歳男性・現時点における公認心理師の対応	C	5 肢択一	適切選択
143	⑯	60 歳男性・事例内容から考えられる病態	A	5 肢択一	適切選択
144	⑯	32 歳女性・事例内容から考えられる症状	C	5 肢択一	適切選択
145	⑰	24 歳女性・暴力被害者が被害関係に留まる現象	B	5 肢択一	適切選択
146	⑰	2 歳女兒・措置変更となるプロセスでの配慮	C	5 肢択一	適切選択
147	⑱	14 歳女子・自傷行為に対する初期対応	C	5 肢択一	適切選択
148	⑱	20 歳男性・大学における合理的配慮	B	5 肢択一	適切選択
149	⑰	16 歳女子・中和の技のうち用いられているもの	B	5 肢択一	適切選択
150	⑳	創業 50 年になる機械製造業・組織の特徴	B	5 肢択一	適切選択
151	⑯	22 歳男性・診断基準に該当する病態	B	5 肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
152	⑱	14歳女子・支援チームの会議における心理師	C	5肢択一	不適切選択
153	⑱	30歳男性・原因帰属の観点からの言葉掛け	B	4肢択一	適切選択
154	⑱	9歳男児・虐待対応担当課への通告	C	5肢択二	適切選択

※表中の難易度や分類などは、河合塾 KALS の独自の判断によるものです。個々の理解や価値観により、難易度や分類は異なります。あくまで参考に留めて頂きたいと思います。

※本資料の無断転載・無断転用を禁じます。